

シトラスの会 研究概要

■シトラスの会とは

シトラスの会は、「令和4年度 東京都図画工作研究会自主研究ゼミ」の有志を中心に発足した図画工作科の自主研修会である。シトラスの会は今年度で発足2年目を迎えた。各地区の研究や都図研ゼミ、都図研研修局、教師道場等に参加しながら、個々の授業力向上を目指しながら日々の授業の悩みや課題を共有し、より良い図工の授業をつくっていかうとしている図工専科の集いである。

■今年度の活動

前年度は集まりやすい立地を重視して、中野区と新宿区の学校を拠点として活動していたが、今年度は児童の作品を直接見ることと各々の図工室の環境を知ることの重きを置き、東京都中に散らばっているメンバー全員の学校を持ち回りで会場とした。基本的には月に1度研究テーマに沿った題材を会場校の担当者が発表して協議を行っている。また、今年度は展覧会を開催する学校に集まり、展覧会ならではの研究協議も行った。

■研究経過

月	会場校 担当者	活動内容
4月	中野区立谷戸小学校 井上愛子	全体テーマ決定 今後の方針について
5月	中野区立谷戸小学校 井上愛子	「自己決定のアプローチの仕方」 本校の図工と最近の悩み 図工年度初めについて
6月	大田区立梅田小学校 江上愛花	「教えて！みんなの図工室」 図工室のレイアウトについて
8月	青梅市立第四小学校 今井陽子	実技研修 わくわく流し・イロコさんとあそぼう 「私の城」4年生
	八王子市立散田小学校 藤城由里	「私のおすすめ版画」 「年間指導計画について」
	新宿区立落合第五小学校 羽根田佳於	「児童の見取りとその学年に合った題材の決め方」
9月	世田谷区立世田谷小学校 大間知彩	「都図研ゼミと展覧会の狭間で」 中学年平面題材研究 展覧会について
11月	江東区立扇橋小学校 鳴海愛	展覧会 実践紹介
	練馬区立大泉第三小学校 新海薫	展覧会 実践紹介

12 月	江東区立香取小学校 松村晃子	展覧会 実践紹介
1 月	板橋区立高島第五小学校 大久保皓央	「工作の粘土、造形遊びの粘土について」
2 月	中野区立谷戸小学校 井上愛子	今年度の成果と課題について
3 月	新宿区立落合第五小学校 羽根田佳於	来年度の研究主題について

1 研究主題 自己決定へのアプローチ

2 研究主題設定の理由

グローバル化や AI の進展、少子高齢化等、社会の急激な変化に伴い、先行きが不透明な社会に移行しつつある中で、一人一人のウェルビーイングの確保が必要と言われている。将来の夢や目標を持ち、一人一人の自己実現を目指すことが持続可能な社会に繋がっているのである。日々の生活の中で経験する、成功体験や新しいことに挑戦し、その過程を楽しむことが大切になる。

図画工作科の授業では、児童が素材や環境に関わりながら自分のいいと思う色や形、興味を持つことに出会い、表現していくようになる。発達段階に応じて材料や道具の経験を積み重ね、高学年では自分がつくりたいテーマを決め、それに合わせた表現方法や材料を自分で選択し、自分を表現する姿が、シトラスが目指す児童像である。つくりたいイメージをもち、児童が主体的に表現していくにはどんな手立てが必要なのか。自己決定するためのアプローチを日々の授業実践を検証しながら研究を進めることにした。

3 研究の視点

シトラスの会では自己決定を「児童がつくりたいテーマや方法、材料を選択すること」と捉えた。また、児童が自ら選択できるように教師が考えた手立てを「アプローチ」と捉える。前学年までに学んできた知識や技能、経験を生かして児童一人一人が選択して表現していくには、どのような環境設定でどのような発問が有効なのか、題材の中で児童が自己決定する場面をどこに設定したか、児童が主体的に選択して活動することができるのか等、題材の意図を明確にしていくことで、児童が自分らしい表現や活動ができる授業づくりができる考える。

4 研究の仮説

児童に考えさせたいこと、児童に身につけさせたい造形的な資質能力を確かにし、児童が自己決定する場面を多く設定することで、自分の選択が増え、主体的に表現していく児童を育成できるであろう。

5 実践報告 一人1ページにまとめ、報告。

6 成果と課題 別紙参照。

最初の図工 どうしてる？

新学期の最初、子どもたちはわくわくの気持ちで図工室へやってくる。そんな中、私はいまいち乗り切れない図工のスタートを切った。図工をもって数年経ったが、子どもたちに図工をどう手渡ししていけばいいのかと悩んでいた。このままでは停滞しそうだと思っていたからである。そこで今回は各メンバーがどのような年度始めを切っているのかを共有した。

本校の図工では作品を鑑賞しながら、子どもたちが楽しんでいた図工と楽しんでいるか疑問に感じた図工を2点上げた。

いいスタート！

3年生「図工室たんけんたい」

図工室の中を探索して、これから扱っていく用具をスケッチする。3年生は今年から図工室で授業に取り組む。のこぎりや金づちなどの用具の特徴を捉えて描くことで、どうやって、何を作ろうかななどを想像しながらわくわくした様子で描いていた。その後の授業では、より用具に関心が高まっていた。

それぞれのスタートダッシュ！

どんな感じ？

西森

4年生は初めて一緒に図工をするので「自分のこと（何が好き・どんな人・どんな書き方を知っているよ）を絵に書いて教えてね」と声をかけて始めた。
5年生の糸のこで「おもしろい形をつくらう」と声かけをして取り組ませたが、4年生の版画でつかった版を切らせようとしたら嫌がる子が多かった。「そうだよね！」となった。
6年生は算数学年になって表したい思いをこれまでに身に付けてきた技能をいかして書く題材に取り組ませた。（ちょっといい紙をつかって）

江上

4年生 絵の具と用具で色々試す
5年生 外に出て季節を感じ、描画材を自由に選んで表現する
6年生 色画用紙を切ったり並べたりして表現する

大関知

教科書の題材を中心に絵から始めた。
3年生 絵の具と水のハーモニー
4年生 絵の具のぼうけん楽しさ発見
5年生 名前アート
6年生 心のもよう

今井

初回は体を動かす系がいいと思って取り組んでいる
2年生 ろくろでぐるぐる描いた
4年生 筆じゃない絵の具のもようづくり
図工の種（藍の種）を育てる
5年生 校庭で春アート
6年生 近所の大塚山でアートする

いいスタート？

6年生「紙で奏でる形と色のハーモニー」

カッターで色画用紙を切り、別の色画用紙を重ねて切って色の重なりや形の変化を感じながら表現する題材。教科書（開隆堂）が新しくなり、始めの方に掲示されるようになった。6年生にはやり方を見せるとすぐ理解して淡々とこなしていたが深まりを感じられなかった。導入の最初の1枚の形に影響される。見通しをもたせる意味では彫りすすみ版画と同じで後戻りができない。

自由に修正できて、行き戻りできる題材がいいのでは？でも全部やり直せたら面白くないし、自分で調整できるように考えさせていきたい。

めあてでつかう「いい感じ」ってなんだろう？ここを教師と子ども達で見つけていかなきゃと思う。

松村

6年生 ゼミ研究授業題材「私のお気に入り」
4年生 るんぷ色水（食紅で、何かあっても大丈夫。）
3年生 線であいさつ（大きい紙に描いた線でコミュニケーションをとる。最初だから子ども同士が関われる方がよいと思った。）
2年生 机の上のぼうけん（机の上に描いたものを1つ置いて、そこからぼうけんを想像して表す。）

羽根田

図工日よりから題材の紹介
子どもたちの振り返りにもなっている

今回の振り返り

色んな考えをもとに始まっていく図工は、その学校の子どもの実態ごとに違う。どんな時間にしていきたいか、どんな力を身に付けてほしいのか、様々な気持ちに触れるスタートだった。来年の4月から図工のスタートを切る時、子ども達とどんな図工にしようか考えていけそう。今、私が大事にしたいのは題材の手渡し方（導入）と子どもの変容である。私自信がこの題材面白い！と思わないと彼らも面白くない。また、図工の面白いを見つけている子どもの姿とまだ見つからない子どもの姿、どのような手立てがあるのか、よく探求し、よく整理しながら取り組んでいきたいと思う。

6年生の「紙で奏でる形と色のハーモニー」は切った後に糊付けするのではなく、紙を数枚選んだあとに重ねてステープラで留め、カッターマットを挟んで切ると重なりを意識できることがわかった。紙を回転したりはできないが、重なりや面白さや見通しやまとまりを意識できる。



「教えて!みんなの図工室」



R6.6.14 大田区立梅田小学校 江上愛花

本校での研修会では、図工室のレイアウトをテーマとした。児童が、安全で効果的に学びを深められる机椅子の配置や、教卓の位置、材料や用具置き場への動線等について情報交換を行った。

●各学校の図工室の写真の持ち寄り

図工室や図工準備室の写真で、各校の工夫を共有した。



●児童が片付けやすい材料の整頓方法



入れ物にラベリングし、しまう場所を明確にすることで片付けしやすい環境をつくる。分類の細かさについては、児童の実態によって様々。



●机の配置の工夫

中央の机を材料置き場として使用している学校が2校、図工室の片側に材料を置く学校が2校、平面・立体によって材料置き場を分けている学校が1校であった。活動内容によって流動的に机や材料置き場を変えることも大切である。

●作品保管の工夫

学級増等で、児童数に対し十分な作品保管場所のない学校が多く、図工室内と廊下の一部、図工準備室を主に使用している教員が多かった。他に、吊るす・重ねるなどの空間を用いる保管、許可をとって倉庫を使用する、棚を設置するなど、各校で様々な工夫をしていた。

【まとめ】

今年度の研修会では、毎回会場校を変えたため、図工室のサイズや机の配置、作品保管場所を実際に見ることができ、自校に持ち帰りやすかった。

整理整頓されていることが図工室の使いやすさに繋がるという前提の上で、教師の予想の範囲を超えた児童の活動が生まれるためには、あえて余白のようなものを残すことも必要かもしれない。児童の想像力を掻き立て、思いついたことがすぐに試せる図工室環境を目指し、試行錯誤を繰り返していく。



【第1部 わくわく流し】

第1部では、2019年から行っている竹を材料とした実践報告を行った。今年度、本校では4年生が「わくわくスライダー」6年生が「わくわくそうめん流し」の竹を材料として使用した題材を行った。竹はどの地域でも手に入りやすい素材だが、授業で扱われることは少ない。秘密基地の芯材や細く加工して工作をする等、使い道があり加工しやすい竹を図工の授業で是非扱ってほしい、そんな願いを込めて「まずは教師自身が楽しむこと」を目的に実技研修として流しそうめんを行った。シトラス以外の参加者も居たので、お昼ご飯を兼ねた交流の時間にした。竹のコースは、図工室の椅子とクランプを使用し、使って、非常階段に作った。図工専科の教員の手にかかれば15分ほどでコースをつくり終え、各自が持ち寄った「わくわくする食材」をみんなで食べることができた。意外とすぐ用意ができて…楽しい！の感想をもらうことができた。

【第2部 実技研修 やってみよう造形遊び】

第2部では、造形遊びを2つ行った。一つめは低学年向けの「イロコさんとあそぼう」。豆腐カップに色水を凍らせたものをつくり、触ったり、溶け色水を集めたり、落としたり、感触を味わいながら活動を探していく造形遊び。二つめは、高学年向けの「水のかたちをみつけよう」。水の他にライトや透明カップ等の身近材を使い、影を写しながら形が変わっていく水の姿をみつける造形遊び。教師が児童の気持ちになって新しいことを見付けたり、自分が心地の良いと感じる活動に浸ってみたりすることで、新たな題材のヒントになっていけばよいと思う。

【第3部 実践報告】

4年生「私の城」の題材実践報告。昨年実施した「大塚山物語」の題材を改良し、地域を生かそうとしている題材。今年度は学校の近所にある勝沼城の跡地に児童を連れて行き、実際に城があった場所で想像を膨らませること、前学年までに経験した描画材を児童が選ぶこと、この2つの手立てから児童が主体的に活動し、より良い表現に繋がっていくと考えた。

(協議より)

- ・児童の作品からは、楽しくかいた事が伝わってくる。作品一つ一つに物語があるので、名札にかいてある作者のコメントが大事。読むとさらに作品の見え方が変わって面白い。
- ・材料選択では、ペンや色鉛筆は扱いやすいという理由で選択している児童がいる。表したいイメージにあっていない方がいいが、絵の具を出すのが面倒な児童も一定数いる。様々な技法を知ってはいるけど、表したいイメージに合わせて選んで表現するのは高学年でないと難しいのではないかな。4年生なりに考えられてイメージを表現できている児童もいるが、できていない実態もあった。
- ・題材で何を学ばせたいか、ねらいが明確だと何を教師が決めて何を子どもに委ねるかが決まってくる。発想に重きをおくのであれば、材料は教師が限定してもよかったのではないかな。

教室で教師の発問から児童のイメージを広げることでもできたが、実際に城跡に行くことで、木々に囲まれている様子を見てから自然を生かす児童や大きな穴を見つけて児童同士で「何の穴だろう…」と考えてアイディアを思い付いた児童がいた。体全体で感じたことをヒントにイメージを広げ、それを表現に繋げることができたと思う。その一方で、表したい思いに合った表現方法や道具を児童に選択させた際、戸惑い、なんとなく楽そうな材料や道具を選択する児童の様子も見られた。それは「自己決定」にかこつけた教師の丸投げの結果であったのではないだろうか。今回の授業での児童が主体的に活動するための手立ては「材料や道具を自由に選ぶこと」では無かったと感じている。次回の課題としたい。





児童の見取りと その学年に合った題材の決め方



「題材設定をする際に、児童の伸ばしたいところを検討して題材を決めるが、自分はきちんと児童の実態を見とれているのか？」というところから、この課題を設定しました。

本校の実態その①

中学年

- ・絵よりも立体が好き、中心になる児童が、絵に苦手意識がある
- ・幼さが気になる学年

自分の作品や周りの人の作品と体で関わりながら絵を描くことで、遊びながら自然と交流が生まれて、鑑賞ができる。

途中の鑑賞はできるようになったが、完成後に人にみせるのを嫌がるのは以前から続いているので、悩みは続いている…。

「談出しパネル」

白ボール紙に穴を開けて周りに絵を描く
作品を描きながら顔を出したり、人の作品で遊んだりしていた。描いている時は楽しそうだが、人にみせるのは嫌がる。



その後

中心となる児童の発言がクラスを引っ張っているため、その子の自信にシフトした声かけを意識している。今のところ、調子よく授業を受けてくれている…。

実態その②

高学年

- ・全体的にやる気が感じられない、積み重ねが感じられず楽しいのかこちらが不安になる…
- ・失敗を不安がっている？



高学年ハイ、学年、人数
15人ほどでクラスの雰囲気は
変わってきている。

その後

担任の協力もあり、一進一退で図工への意欲を持たせようとしている。中学年以前での造形遊びの経験が必要であったと強く感じる。

- ・高学年の造形遊びをしないのはいいけど、経験のある題材は寄せ付けずにもっと自由に活動してほしい。
- ・不安のないよう、経験のある題材は寄せ付けずにもっと自由に活動してほしい。

授業に消極的な理由を探る。

⇒気持ちのハードルを下げる必要がある。長時間じっくりと取り組むことが難しければ、その瞬間の「楽しい」を積み重ねる。うまくいかなくても別の方法を試したり。何度も挑戦したりできる造形遊びが必要。



今年度の成果と課題

中学年、高学年ともに、私が初任時からの付き合いのため、今よりもっと自信のない授業をしていた自覚がある。そのため、積み重ねることのできたはずの経験が抜けている部分が大さく改め感じた。今年度のシトラスでは、他校の先生の教室環境を見たり、リアルタイムの悩みを共有することで、指導の改善に大きくつながっていた。

連続した経験を大切にし、児童の声を聞いて実践できる授業を作れるよう、今後とも取り組んでいく。





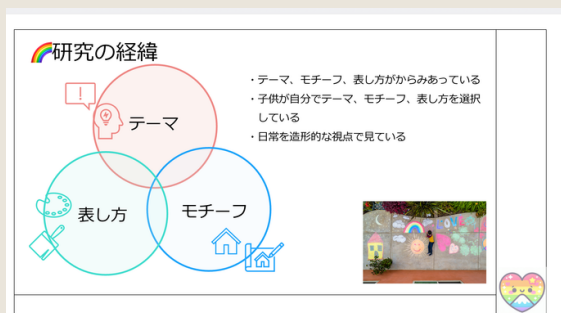
実践報告

世田谷区立世田谷小学校 大間知 彩

富士レインボーハート問題

今年度都図研ゼミにも所属し、その中で児童の表現が「富士山」「虹」「ハート」などに固定化される課題についてシトラスの会でも提案した。

児童が記号化されたモチーフを描く背景に、「テーマ」「モチーフ」「表し方」の整合性が取れていない状況があるのではないかと話をした。



児童の表現の幅を広げるために

メンバー達からは以下のようなアイデアが出た。

- 「今表したい気持ち」では自由にテーマと表現を選ばせたが、具体的な場面を描く児童が多かった。
- 鑑賞を重視し、多様な表現の経験を積ませる。
- 児童の固定化した発想を防ぐには、教師の問いかけや新しいイメージの提供が重要。
- 児童が「心が動いた瞬間」を記録する活動や、言葉から発想する方法も有効。

木版画の実践例と題材について

話題は木版画の実践に及んだ。木版画の授業では技術を教える必要があるだけに、題材設定の裏側には各々の考え方の違いがあるようだった。

題材の工夫:

- 「刷り」から入り、インクのグラデーションを活用する。
- 「ときめきキュンキュン版画」。
- 「好きなものを教えて版画」。
- 「パッチワーク版画」。

指導のポイント:

- 版画の特性（複数枚刷れる）を活かす。
- 児童が彫ることにワクワクする仕掛けを作る。
- 「彫る」という行為自体の楽しさや感覚を大切にする。



その後の実践

自分の実践として、まずは長年テーマを決めてやってきた版画題材をテーマフリーで行うことから始めた。自分の好きなこと、心が動いたことをヒントとして提示したが、自分の好きなスポーツ、自分のキャラクターなどを表す児童が多かった。技能面の深まりで課題はあったが児童が自身で選ぶ経験としては価値があったと思われる。

富士レインボーハート問題について、ゼミでは『WIC（わたしのちょっとしたいい感じ）』という研究授業と日常のいい感じを大別し、題材を通していろいろないい感じを積み上げていくことをカリキュラムマネジメント的に提案した。様々な児童のいい感じが出てきたという点でよかったものの、漫画や絵文字でも表されるようなエピソードを絵に表している状態であるとの指摘も受け、改めて平面題材の難しさを感じた。

6年生「ちっちゃい美術館」

きっかけは6年生の「わたしはデザイナー」の作品が早く完成した児童のためにおまけとして取り組み始めた題材である。教師からは、

- ・手のひらに収まるサイズで制作する
- ・今まで使ったことがある材料や用具を生かす
- ・平面、立体のいずれでもよいが展示することを前提として取り組む
- ・材料は図工室の中にあるものは全て自由に使ってよい

ことを制作の条件として提示した。

気軽な気持ちで始めた題材だったが、児童の作品は実に多様で一つ一つに「その子らしさ」が表現されていた。

本校は地元の祭礼が盛んで古くからの結びつきの強い住人と、近年建設された大規模なマンションに転入してきた住人が混在する地域にある。保護者の教育に対する関心は概ね高く、児童は素直でのびのびとしており、大人への信頼度が高い一方で、依存度も高い。指示されたことに沿って行動することはできるが、身の回りの課題を自分ごととして捉え、自ら解決していくことが難しい。図工ではこの素直で前向きな面を生かしながら、自ら考えて決めることができる児童を育成したいと考え、児童の自己決定場面を多く設定できる題材を模索している。

「ちっちゃい美術館」は、結果としてこのような児童の実態に合致した題材だった。大きさを手のひらサイズに制限したことは、児童が思いを込めることに有効であった。「わたしはデザイナー」に続いて取り組んだことで、用具や材料についても木材をはじめ紙類からプラ容器、その他の身辺材を組み合わせて活用する姿がみられた。

その後のちっちゃい美術館 「究極の!図画工作」

この経験を生かして6年生は卒業制作として12月後半から「究極の!図画工作」という題材に取り組んでいる。

導入では「自分にとっての図画工作を極めよう」と声かけをした。制作の条件は「ちっちゃい美術館」と概ね変えていないが、作品の大きさについてはより一人一人が自分らしさを追求することができるように制限をなくしている。

成果と課題

これらの実践を通して自分自身の成果と課題を以下の通り捉えている。

【成果】

- ・児童一人一人が無理なくのびのびと「その子らしさ」を表現することができた。
- ・児童が「何を(テーマ)」「何で(用具・材料)」「どうやって(技法)」を選択することで、自己決定させることができた。

【課題】

- ・技能の習得が十分ではなく、表現方法が限られていた。
- ・鑑賞のタイミングや視点が明確ではなく、児童間の交流を通した発想の広がりや深まりが見られなかった。

以上の成果と課題から、発達段階に応じた技能を確実に積み重ねていくことでの大切さを痛感している。知識・技能と思考・判断・表現は相互に作用し合っている。児童が自らの経験を通して得た知識・技能を時には教師側が補いながら、確実な定着を図りたい。

精選すべき点も多く、まだまだ模索中の題材である。さらには学年ごと学級ごと異なる児童の実態によって絶対的な正解もない。それでもこの題材を通して、これまで不登校傾向だった児童が週に1回の図工の時間をきっかけに少しずつ登校できる時間を増やしていけるようになったり、卒業を前にして一人一人の児童の「その子らしさ」を新たに知ることができたりと、自分自身にも小さな喜びや発見がたくさんあった。

自分で考えて決めるのってドキドキするけどワクワクして楽しい、そんな気持ちを児童と大切に共有していきたい。

展覧会実践紹介

開校80周年記念展覧会テーマ

「アートの力は無限大！

～キラリと輝く、みんなの個性～」

〇5年生「でこぼこ広場に絵の具が走る」

板ダンボールに身辺材料を貼り、液体粘土をかけた後、絵の具で描く題材。導入では「いつもは四角い平らな紙に描いているけれど、今回は形も自由に凸凹していてもいい自分だけのキャンバスをつくって絵をかくよ。」と伝えた。「みんなそれぞれの形や表現の人が多いい。それは普段から自由度の高い活動をしているからではないか。」との意見をいただいた。自分では普段意識していないことだったので、これまでの授業の積み重ねが現在の表現につながっていることを改めて気付かされた。

〇展示方法の工夫

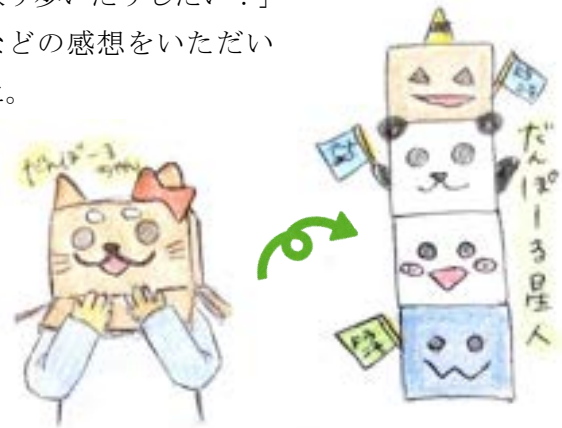
本校の体育館はかなり広く、天井も高い。共同制作は手すり等からの吊るし作品を多く取り入れ、体育館で展示できる展覧会だからこそできるような活動を多く取り入れた。また、3年生の立体「まぼろしの生き物」では、テント枠や不織布等を利用し、森や川などをイメージするような空間をつくっておいた。作品搬入では児童が設置したい場所に作品を置いたり吊るしたりし、実際にまぼろしの生き物がそこで生きているかのように展示をした。他にも、4年生の立体「発見！伝説の〇〇」では、「今年80周年の学校には、伝説の〇〇がいて、みんなが学校を探検していたら、発見したよ。」という投げかけで土粘土を使いつくった。展示の際には、児童の「どこで発見されたか」というイメージに合わせ、発見場所をイメージできる展示台をつくった。

子供たちの無限に広がる創造力が体育館いっぱいに輝いてほしい！と思い、テーマを設定した。また数字の8を横にすると無限大のマーク(∞)になるので、周年とも絡めたものとなっている。勤務校での2回目の展覧会、前回と全て同じ題材にはしないことを意識して臨んだ。

〇3年生「だんだんぽーる」

一人一個の段ボール箱を用意し、「初めに被って変身できる「だんぽーるちゃん」をつくること、その後はみんなで集まって展覧会を盛り上げる「だんぽーる星人」になることを伝え活動した。参加者からは、「だんぽーるちゃんになって鑑賞したり、練り歩いたりしたい！」

などの感想をいただいた。



〇5年生「絵の具をたらしして広げてみたら…」

画用紙にたらしした絵の具をプラカップで広げていき、そこから思いついた表したいものを描く活動。「似たような表現が多くなっており、『なぜその道具なのか、どんなことを学んでほしいのか』などがぼやけている印象がある。初めて行った題材とのことなので、今後に向けて改善が必要」と指摘を受けた。ローラーの活動のように、筆以外のものをつかって表現する位置づけで写實的に描くのが難しいのが良いと思って取り組んだが、もう少し教材研究を深めていきたい。

今回、実際に展覧会を鑑賞した参加者から質問や疑問点に答えていく中で、なんとなく進めていたことや考えの詰めが甘かった点などを知る機会となり、大変勉強になった。また、教科書題材をベースに授業を考えている題材が多いのだが(特に平面題材)、参加者から指摘もあった通り、自分なりの題材名、題材へと変えていくべき段階になってきていると感じた。課題を指摘された題材では、次回授業で行う際に考えや目的等を整理し、授業の精度を高めてから臨みたい。

展覧会について話そう！

江東区立香取小学校
松村 晃子

今年、教員になって初めて展覧会を実施することになった。私が着任した当時、コロナ禍であったこともあり、これまでずっと「校内作品展」と称して1月下旬頃に校内の空き教室や特別教室を活用して小規模に実施していた。それをやめて、学習発表会・音楽会と同じ文化行事として3年に1度実施することになった。

展覧会に向けて子どもたちと準備を進めていく中で、不安に思ったことや疑問を今回の研究会のテーマとして提案し、メンバーから意見をもらった。

授業の計画、どうしてますか？

展覧会を実施するにあたり、年度初めから展覧会を見据えた題材に取り組んできた。「人前に出すものだから、児童の納得するものを出したい。」という思いから、例年よりも一つの題材に長く時間をかけて取り組んだことが多々あった。しかし、図画工作科における子どもの育ちを考えると、いろいろな領域に取り組みたいとも思い、悩んだ点であった。

自分と同じように子どもが完成に至るまで十分時間を取る場合と、日頃の学習の延長であるということから特に変えていないという場合と両方あった。また、予定通り進めて少し時間ができたときに、「もう少しやりたかったものをもう一度やる」ことができるようにしているという例、前年度の作品も含めて展覧会に出品する例などもあった。

6年生の活躍の場って？

学習発表会や音楽会と違い、子どもがライブで活動する場ではないことから高学年にどのように行事に主体的に取り組んでもらうか悩んでいた。今回、6年生には共同制作で「顔出し看板」をつくってもらい、鑑賞者が体験する作品をつくることにした。また、土曜日の1・2時間目に全校児童で校庭に絵を描く「フェスタタイム」を実施した。たてわり班での活動としたので、6年生には「自分が楽しむことを最優先にしてほしいが、班の子が困っていたら助けてあげてほしい」と伝えた。

他校の実践として、児童による鑑賞ガイド、展覧会実行委員会を立ち上げてテーマソングやWEBサイトをつくった例など、多岐にわたる実践を共有した。

展覧会当日、うっかり早く体育館に入ってきてしまった児童がいた。入るなり「すごい…」とつぶやき、目を輝かせて会場を見まわしていた。子どもの作品が集まって、それぞれの色と形が響き合い、展覧会にしか生み出せないエネルギーのようなのがあったのだと思う。

後日、子どもたちに展覧会の感想を聞いた。6年生の児童から「体育館ではない場所に飾ったらおもしろそう。」「もっと体験型の作品がほしい。」など、非常に参考になる意見が多数挙がった。私が思っているよりもずっと、6年生は主体性をもって展覧会と関わってくれていたのだと感じた。

まだ改善の余地ばかりであったが、今回の経験を基に、次はもっといろいろなことに挑戦したい。

土粘土のもつ「つくり、つくりかえることができる」という特性が、立体にも造形あそびにも魅力的な要素になると感じていて、3年生以上で土粘土の題材を取り入れ、作品作りを行っている。今回4年生と6年生の実践の報告を行った。

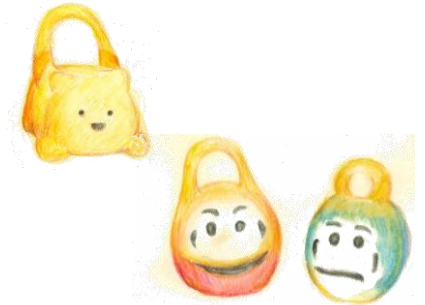
○4年生題材「土の音」

音楽とコラボした題材。粘土で形を作り、中に新聞紙でくるんだ粘土の玉を入れて焼くことで、振ったら音が鳴る土鈴を作った。教師からは「大きさや形などどんな風にしたら音が出るか？」と提示し、児童が考えながら形をつかった。3学期にこの音を使って音楽をつくる予定。

参加していただいた先生からは、

- ・土鈴を作るのは楽しいが、なぜそれを作るのかの動機づけ（必然性）
- ・この学年で土鈴を作ることの難しさ ・作品の見本の精選

等、様々なご指摘をいただいた。題材の課題が多く見つかったので、テーマの設定や、制作の手順・ポイントなどを精選し、改善をしていく。



○6年生題材「粘土に合わせて」

高学年で土粘土の作品を作っていくと、どうしても実用品や日用品（コップやお皿、入れ物等）を選ぶ児童が多いように感じていた。児童の想像を広げたく、作品のテーマを例年の「使ってみたいもの」から

「土粘土と別の素材を合わせてみる」に変え、アプローチを試みた。土粘土に合わせる材料は自由とし、いままでに使用した材料を使用できるように環境を整えた。

参加していただいた先生からは、

- ・紙粘土でなく、あえて土粘土で行うことで焼き物の面白さを感じられる。
- ・作品の完成のイメージをもって取り組んでいる。別の素材の扱いが焼き物と同列な児童がいたり、焼き物の装飾として使っていたりする児童がいた。
- ・6年生としての蓄積が見える面白い題材。他県の研究発表で、毎年同じ素材を積み重ねていくこと（焼き物を小学1年生～高校生）の効果を知ったので、それと同じように感じた。

というご意見を頂いた。

今回ことから、児童の想像を広げるには積み重ねていくことが重要であると感じた。積み重ねていくことで、児童が自ら選び、組み合わせ、作品を作っていくことが出来るので、児童の経験が高まるような題材を設定していく。



○成果と課題

- ・立体作品などは実際にきて見てもらったほうが作品の良さや課題がわかるので、今回来校してもらい、様々な意見をもらえたことはとても良かった。また、題材を違った視点で見てもらうことで、自身が気づかなかったことが分かり、今後の改善点に生かすことができた。
- ・粘土という素材を生かしていくためには、今までの積み重ねが大事だということが分かった。しかし、児童によって何を積み重ねていくかを考えながらやっていく必要があるので試行錯誤していく。

おわりに

板橋区立高島第五小学校 大久保 皓央

「シトラスの紀要の”おわり”の担当をお願いしたい」。2月のシトラスの会で言われた時、正直その場で首を横に振ってしまった。もともと、文章を書くことを苦手としていたのもあるが、”おわり”というものが、何かをまとめる報告書ではなく、ある種自由に書くことができる創作物みたいなものだったからである…。

「とりあえずやってみよう」と担当を引き受け、こたつの中で何を書こうか考えていると、ふと「文章を書く」ということと「ものを作る」ということはとても似ているな」と思った。それぞれの教科を比べると、国語では、低学年で言葉の意味を気付き、中学年で自分なりの言葉が分かり、高学年で様々な言葉の組み合わせを理解していく。図工では、低学年で様々なことを体験し、中学年で何を作りたいか、どう感じるかが分かり、高学年で今まで得たものを組み合わせて自分なりの表現をしていく。少し強引ではあるが、大まかな部分は似ているのではないだろうか。

このことを考えていると、よく子どもが図工で「何を作ったらいいか分からない」と言っている気持ちが理解できたような気がした。私が今まさに思っている「何を書いたらいいか分からない」と同じ気持ちである。この気持ちが少し分った今、児童が作りたいと思える、きっかけがある題材や学習環境をどのように作っていくか、工夫し考えることが出来るのではないか。私の中で、来年度に向けての新たな図工のテーマが生まれたような気がした。

振り返ってみると、今年度のシトラスの会では、そんな新たな図工のテーマのヒントになることをたくさん学んだように思う。東京都のいろんな区にある学校を会場校に設定することで、図工室の学習環境や図工作品、図工専科の思い、展覧会のやり方などを見たり知ったりすることが出来た。子どもが自由に発想を広げられるようにする教室の工夫、地域の環境から生まれてきた題材や図工専科の思いの詰まった題材など、自分の学校にいただけでは決して学ぶこと・知ることができない貴重なことをたくさん発見し、共有することが出来た。このような学びの機会を共に作り、一緒に活動することが出来たシトラスの会のメンバーにはとても感謝をしている。読んでくださった皆様にも、少しでも私たちが発見した気づきが伝われば幸いである。

最後に、いつもシトラスの会を気にかけてくださり、参加もして下さった狛江市立狛江第五小学校 山野井誠先生。シトラスの会を行う際、快く会場校を提供していただいたシトラスの会メンバーの管理職の先生方、心から感謝を申し上げます。